

かつて本欄で、国語辞典の土木の説明が土木の実態を踏まえたものになっていないと記したことがあ
る。「土と木」などと土木という表
記にとらわれたような説明や、土
木が何のために行われるものなの
かといった土木理念を提示してお
らず、土木の本質が伝わりにくい、
というより伝わらない説明ばかり
であると嘆いたのだった。

国語辞典説明の コペルニクスの転換

『しびるえんじにありんぐえっせ
い』(山海堂)をペンネーム・小泉純一
で発表したのは、昭和六十三(一九
八八)年のことだった。当時も、証券
バブルとかに浮かれていた時代で、
「金融さえ回っていけば実物経済な
どどうでもいい」というような極端
な雰囲気もあった時代だった。

地道な土木事業などは、極めて
ないがしろにされた報道しかなさ
れず、こんなことでこの国は大丈
夫かという思いが、このエッセイの
出版につながったのである。

この説明に対し、「えっせい」で
指摘した事項は、以下の通りで
あった。

①土木が利用する材料は、ここ
に例示されたものばかりなのか。
近年、橋脚の耐震補強のために炭
素ファイバーシートで巻き立てるこ
とがあるが、それは土木ではないの
か。②道路から上下水道までを列
挙しているが、これらはなぜ例示さ
れているのか。これらの共通点は何
なのか。③土木とは工事のことな
のか。大学の「土木工学教室」は、工
事のやり方を極めるところなのか。
何はともあれ、画期的な土木の
説明を成し遂げてくれた三省堂『大
辞林改訂第四版』の発刊を心から
喜びたいし、三省堂はじめ改訂に努
力された方々に心から感謝したい。

国語辞典での 「峠」の説明

国語辞典の説明に疑問があると
いう意味で、次に国語辞典の「峠」の
説明ぶりを紹介しておきたい。これ
も、まずすべての辞書が次のように

三省堂『大辞林』の画期的改訂

国土学アナリスト 大石 久和 Hisakazu Ohishi

下
言
上
用

Kagen
Jouyo

このとき、土木がどのように国語
の辞典で説明されているのかを、流
布しているほとんどの辞典を調べて
がっかりした経験がこの「えっせい」
に記したのが、国語辞典の土木表
記についてこだわりを持ち始めた
最初だった。

その後、長い年月を経て第一〇五
代の土木学会会長に選任されたと
き、辞典の土木表記をそのままに
しておいたのでは、土木の理解を深
めることができないと考え、国語辞
典を発刊している大手出版社の三
省堂ともう一社と打ち合わせをす
る機会を持ったのだ。

土木事業の種類や、それぞれの
事業目的、土木工学の学問的内容
などを説明したところ、なんと三
省堂は「次回の改定時に考えてみ
たい」と返答してくれたのだ。もう一
社とは、筆者は直接面談できなかつ
たが、土木学会の仲間の熱心な説
明にもかかわらず、われわれの意見
を受け入れる考えはなく、検討す
るとの回答はいただけなかった。

それから二年ほど経った今年の
秋に、三省堂の『大辞林』が改訂第

説明している。

峠Ⅱ「手向け(たむけ)」の転。
通行者が旅路の安全を祈って道祖
神に手向けた所の意。『峠』は国字
しかしこれでは、異郷との境界とい
う意味を「峠」が含意することを説
明できていない。

この説明にあるように、峠という
文字は中国由来ではなく、日本人
が作った漢字である。中国人がこの
漢字を作らなかつたのは、作る必要
がなかつたからであり、つまり峠と
いう概念が日常の生活に不要で
あつたからなのである。

もし国語辞典の説明のように、
旅路の安全を神に祈る言葉だとい
うのなら、中国の人々があの大大陸
の移動に際して、安全を祈願しな
かつたはずがない。まして、昔は至
る所に山賊や盗賊が群れをなして
割拠していたのだ。祈りなくして旅
などできなかつたに違いない。

それでも中国人が峠の概念を必
要としなかつたのは、旅の安全を祈
る道祖神がなかつたからではない。
峠と説明すべき「地形が身近にな
かつた」からなのだ。

四版として発刊された。なんと、こ
の改訂第四版の説明は、大仰では
なく明治以来の国語辞典における
土木の説明のコペルニクスの転換を
していたのだ。

第四版の説明のポイントを抽出
して記すと、以下の通りである。

土木Ⅱ「道路・橋梁・鉄道・港湾・
堤防・河川・上下水道など、あらゆる
産業・経済・社会等人間生活の基
盤となるインフラを造り、維持・整
備していく活動」

ここでは、インフラ(＝インフラ
ストラクチャー)の意味をキチンと説
明してあるし、それは何から構成さ
れるのか、それは社会においてどう
機能するものなのか、ストレート
に表現されている。

『しびるえんじにありんぐえっせ
い』以来三〇年、これを待っていた
のだ。

これがいかに画期的なのか、旧版
の説明ポイントを記してみよう。

土木Ⅱ「土石・木材・鉄材などを
使用して、道路・橋梁・鉄道・港湾・
堤防・河川・上下水道などを造る建
設工事の総称」

中国人が文明を育んだ中原地帯
は、ヨーロッパの平原を遙かに超え
る「大大平原」だった。ここには、越
えるべき山など存在していないので
ある。当然ながら、山の鞍部である
峠もない。

「手向け」から転じたとの説明は
いかにも苦しい。「たむけ」を何万
回言っておれば、「とうげ」にたどり
着くのだろう。「たむけ」と「とう
げ」の間の遷移語は万葉集か何か
に発見されているのだろうか。この
説明には無理があるのだ。一方、日
本と同じように山がちの国土を持
つ朝鮮半島には、峠の概念があり、
それを朝鮮では「こげ」(goge)と
言うのと、ある韓国人から聞いたので
ある。

この「こげ」という音が日本に移
入されて「とうげ」となり、日本人
が該当する漢字を作つたに違いな
い。どの分野においても、「その説明
は正しいのか」「論拠となる事実を
しつかり踏まえているか」に敏感で
ありたい。でたらめな主流派経済
学が跋扈するこの国では、特に注
意が必要だ。